

B-6					
主題	傾聴専門・介護補助員「さくら」の導入による認知症ケアへの効果について				
副題	2年間で対象となる認知症の方の御様子がどのように変化したか				
キーワード 1	人員不足	キーワード 2	ケア	研究(実践)期間	24ヶ月
法人名・事業所名	社福) 親和福祉会 特別養護老人ホーム小松原園				
発表者(職種)	高津智広(介護職員)、山田聡洋(フロアリーダー)				
共同研究(実践)者	佐々木妙枝(フロアリーダー)、他				
電話	042-654-8331	FAX	042-654-8330		
事業所紹介	1998年に開所した、定員117名、短期入所6名の八王子にある従来型特養です。重度化に伴い平均在園期間は3.7年で、特に認知症の方の割合が年々増えています。「選ばれる福祉の拠点を目指す」の経営方針のもと法人の在宅サービス(デイ、居宅、見守り、包括)と一緒に地域包括ケアの構築に少しでも貢献できるように日々取り組んでいます。				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>今後、認知症の方は800万人になると言われているが、社会に増え続ける認知症の方を介護している御家族様の介護負担の軽減を図ると共に、認知症の方の居場所を作ることが社会福祉法人の役割として必要となる。特養の入居基準が原則要介護度3以上となり、認知症の方が今まで以上に増えてきている。その上、介護人材不足もすすむ中、介護職員の業務負担が増し、入居者様へのケアが不十分になってしまっているという事態がある。不穏になる入居者様も増え、益々業務負担が増加するといった悪循環が発生している。そのため、入居者様に寄り添う事を専門とする補助員の必要性を感じ、2019年4月より、傾聴専門・介護補助員「さくら」(以下、さくらと省略)を導入するに至った。さくらの名前の由来については、単に介護補助員では堅苦しく浸透もし辛い。導入を開始した月が桜の季節であったこともあり、入居者様の笑顔が、「桜の花が開くように」と想いを込めて、さくらという名前に決定した。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>さくらが対象者(認知症高齢者)に寄り添うことで、日常の様子にどのようなプラスの効果があらわれるのかを検証する。これを本研究(実践)の目的とし、以下の仮説を立てた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 落ち着きのない入居者様が、長く穏やかさを保つことができるようになる。 2. 心の閉じこもってしまっている入居者様の笑顔・発語・動作が引き出される。 <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>本研究(実践)の取り組みは、認知症対応委員をコアメンバーとして開始した。さくらを募集した結果、はじめ3人が入職された(いずれも介護未経験)。出勤時間は、10:00~16:00。日に1人~2人のさくらが出勤するようにシフトを組んだ。</p> <p>さくらの対象者の選択は、フロアの入居者様約50人の内、特に不穏で落ち着かない方3名を挙げ、リストを作成することで情報共有した。生活課題として、以下のものがある。</p>					

I 様 → 徘徊、収集癖、放尿、他害、異食、怒りっぽい等が見られる。

T 様 → 他者に対する攻撃的な態度、車いすからの転倒の危険性等が見られる。

H 様 → 自操して動き回り、車いすからの転倒の危険性等が見られる。

基本は、さくらが対象者に寄り添い声掛け・傾聴することで、対象者の緊張・不安を取り除き、安心感と穏やかさを保てるよう働きかける。その際、相手の状態に応じて、スキンシップ・フロア内のお散歩・遊びを通じて、よりその効果を高めるよう努めた。対象者一人に対して、一日どれくらいの時間をかけるのか、といった時間的制限は設けず、さくら個々の人柄に任せて、その日の内に、対象者とできるだけの寄り添いを実施した。対応困難な場合は職員がフォローする等して対応した。主に認知症対応委員会の席で、現状の報告と改善等について話し合うことで、部署間の情報共有をした。委員会にはケアマネージャーも出席しており、さくらの寄り添い実施をケアプランへ盛り込む等の検討もされていった。塗り絵、ボール、折り紙、毛糸等の施設にある道具を活用したが、新たに道具を買い揃えるようなことはしていない。

活動の成果を出すポイントになったのは以下の2点である。

(1)対象者の情報共有。 → 申し送り・連絡ノートの活用。

(2)さくらのコンディション・モチベーションの向上・維持。

→ さくらと介護職員とが話し合う機会を設け、さくらに有用感を感じて頂く事。

→ 対象者のプラスの変化を共有する。

《4. 取り組みの結果》

さくら導入から6ヶ月経過した時点で、プラスの変化が著明となった。上記にあげた、I様の生活課題がウソのようになくなったのである。あれだけリスクの高かった方が、半年間寄り添い続けた結果、見事に变化したのである。T様も友好的になり、人を拒絶していたが、逆に人を求めるようになった。H様も、落ち着き、穏やかさが増した。この3名の成功体験をもとに、他の対象者にも挑戦を続け、本研究(実践)開始より18ヶ月後には、さくらは6人に増え安定し、他フロア(入居者数:約50名)にも3名配属されるようになったのである。フロアの職員からも、時間と共に、「さくらがくる前より穏やかになった」「いてくれると助かる」といった声があがるようになった。

《5. 考察、まとめ》

業務に追われる職員が、入居者様とじっくり向き合うことが困難な状況下で、それを専門とするさくらの存在は、長い時間一人でいることで感情が不安定になる入居者様の心を癒やしていった。その結果、生活課題となる症状が収まるだけでなく、沢山の笑顔・発語・動作を生み出していった。この成功体験は、本研究(実践)の仮説を証明したと共に、さくらを通じて、「入居者様の目線に立ったケア」が如何に大事であるかを改めて学んだものとなった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「認知症の取扱説明書」(2018年)(著:平松 類)(監修:内野 勝行)(SB新書)

「PEAPにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル」(2010年)(編集:児玉桂子、沼田恭子、古賀誉章、下垣光)(中央法規出版)

「ユマニチュード入門」(2014年)(著:ロゼット・マレスコッティ、イヴ・ジネスト、本田美和子)

《8. 提案と発信》

認知症の方々が穏やかに安心して過ごして頂くための生活の場をつくるには、職員が連携してケアを見直し、環境を整えることが必要となる。入居者の目線に立ったケアを目指して一歩ずつ前に進んで参りたい。